

2611

2011

今月の憂いゴト

田中康夫

オバマ大統領の再選から、
三島由紀夫の愛国観、
風営法のダンス規制、
贈与のネットワークまで！

11月3日、兵庫県神戸市にオープンした
横尾忠則現代美術館の開館記念展を鑑賞し、
60年代の代表作『ピンクガールズ』の前で
ツーショットを撮影した田中・浅田両氏。
年の瀬を迎える日本人の愛国観を語り合った。

photographs by Hiroshi Takaoka text by Kentaro Matsui

浅田彰

No goal for life



2005

憂国呆談

season 2 VOLUME 30

アメリカ、中国、そして東京。 リーダーはいかにあるべき？

浅田 アメリカでバラク・オバマ大統領が辛うじて再選を果たした。選挙の1週間ほど前の10月末にアメリカを襲ったハリケーン「サンディ」が神風だったのかもしれない。被害を受けたニュージャージー州のクリス・クリスティ知事は、予備選でミット・ロムニー候補に負けた共和党の大物なだけに、オバマが彼と被災地を同行視察して、超党派の協力体制で問題を解決する姿をアピールできた、あれが最後の一押しになった。

それにしても、失業率8%という不況が続く中でも勝てなかった共和党の混迷は深いね。そもそもブッシュ共和党政権が金融危機を招いたわけだけど、オバマの経済政策じゃ手ぬるいからまた共和党にやらせろって言いながら、対案は金持ち減税と緊縮財政だけ、そもそもそれが危機を招いたんだから。何がなんでも「小さな政府」を目指す過激な右翼「ティーパーティー」派が強くなりすぎて、中道だったロムニーさえ右翼に転向しないと予備選挙に勝てない、そうなると思えば本選挙には勝てないわけだ。

一方、人口動態を見ると、ヒスパニックをはじめとする有色人種や若年層が増えて、長期的には民主党が有利。2つの州の住民投票で同性婚合法化が支持されたように、リベラルな傾向は明らかに強まっている。だからこそ共和党右派がヒステリックに反応してるわけだけど、ますます泥沼にはまるだけだと思おうな。

田中 映画評論家の町山智浩によれば今回、企業や団体が政治CMを膨大に流した。それも「オバマは父から白人への憎悪を引き

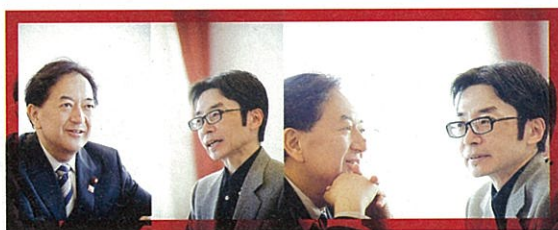
継いでいる」「オバマの医療保険改革であったの保険はなくなる」といったネガティブ・キャンペーンが朝から晩までね。オバマ陣営も公共放送PBSへの補助金をカットするロムニーへの当て付けで「教育番組『セサミストリート』のビッグバードもロムニーに反対」というCMを展開した。

資金提供しているのは無制限に献金を受けられるスーパーPAC(政治活動委員会)と呼ばれる勝手連の組織で、ティーパーティーの黒幕的存在の石油化学産業の経営者は、富裕層への増税を掲げたオバマを中傷するために2500万ドルを提供したというから、地獄の沙汰も金次第。皮肉にも前回の大統領選でオバマ陣営が1000万ドルの小口献金で、史上最大の選挙資金を集めたのが、こうした現象を生んだ。政治資金規正法を作った對抗馬のジョン・マケインは「こんなことをすると選挙が金まみれになる」と危惧していた。そのブーメランをはね除けて、オバマが勝利した。

浅田 ただし、短期的には議会のねじれ状態は続いたままだから、いわゆる「財政の崖」を超えられるかに始まって、オバマがどれだけ力を発揮できるかは未知数。前回の議会の法案成立率なんてたった2%だったからね。

田中 選挙後も閉塞感が漂うアメリカだけど、ひとつ優れているものをあげるとしたら、学校。例えばアフリカの若手作家がアメリカから資金援助を受けて留学して、帰国後に大臣になったりしている。中国の首脳部も胡錦濤以外は子どもが全員と言っていいほどアメリカに留学してる。仮にハーバード大学で出席必須の父兄参観があったら、その日は北京の中枢は誰もいなくなっ

ちゃうだろうと言われているほど(笑)。アメリカにとつての学校教育が、世界を席巻する米語と米ドルに次ぐ大きなハードパワーになっているんだね。



浅田 その中国では2002年から続いた胡錦濤体制が終わり、周小平新体制が誕生したけど、胡錦濤と李克強ラインを抑えて、江沢民が周小平を無理にトップに据えた模様。とはいえ、共産党大会が1か月も遅れ、最後の最後まで人事がもつれたのを見て、新体制の足元はかなり不安定だろうね。鄧

小平の改革開放路線の上で、江沢民が経済成長を軌道に乗せたあと、胡錦濤はむしろ格差の是正や腐敗の根絶を目標にしたわけだけど、格差も腐敗もこの10年でますます広がって、それで薄熙来が毛沢東時代の革命歌を復活させて人気を博したりもした。習近平はあらためて格差の是正と腐敗の根絶に取り組まなきゃいけないわけだけど、江沢民に推された太子党(党幹部の子弟)の彼にそれができるかどうか。

田中 中期的に眺めると、江沢民も道連れに「引退」した胡錦濤の勝利かもしれないね。習近平は早晩、胡錦濤と李克強と共闘するしかないと思う。

そんな中国と、首相時代に「戦略的互惠関係」を取り決めた自民党の安倍晋三総裁は、日本人からすると中国は共産党一党独裁の国で、自由経済なんていつか破綻すると思ってるけど、国民の皆が昨日よりも豊かになるという意味では経済成長も可能で、それは、13億人の巨大な国では共産党の指導の下で集中的に行われなければという無理だと言っている。つまり、中国のやり方を認めたらうえて互惠関係を結ぶ必要があると。テーブルの上で握手しながら、

下では足で蹴り合っていたとしても、防衛費を大幅に増やすという発言ばかり取り上げられている安倍だけど、単に媚中派、嫌中派の政治家よりは中国としたたかに渡り合おうとする姿勢は感じるね。

浅田 それよりも危険なのは、反中・反米・自主防衛の石原慎太郎路線だね。現に東京都知事時代のスタン・ドブレーが中国を煽って無用な緊張をつくりだしちゃったし、アメリカともうまくいかないに決まっている。そういう「北風」政策を掲げながら、「太陽の塔」ならぬ「太陽の党」を旗揚げしたけど、橋下徹からは微妙に距離を置かれてるみたいだし、第三極の中心になれるのかどうか……。と言ったら、いよいよ解散・総選挙ってことになった。野田政権としても自分から打って出るほうがいいだろう。と。実際、第三極の結集は間に合いそうもない。

田中 いつ、どこで墜落するかわからないオスプレイならぬ「オジプレイ」と囁かれている石原は、「減税日本」の河村たかしと二人で合併会見した翌日に破棄し、橋下と「大同団結」した。なので19日に出演した「みのもんたの朝ズバッ！」で日本維新の会を巡る第三極合流の動きに関して述べたんだ。それを朝日新聞が再録していたのだからここに記すと、今回起きたことは「エルメスとシヤネルが同じ売り場で売ってます」って。これは、アウトレットにしかならぬ。ましてや、私のヴィトンと伊のプラダを売っているという話になると、「国籍も違うんじゃないの」というのが国民の思いじゃないか。うちは明確な主張を持ったブティックだから(笑)。

それと、もう一つ、「民主党の」安住(淳

幹事長代行)さんや輿石(東幹事長)さんが選挙後も民自公でやりますって。だって選挙なんかする必要はない。こんな景気の時に」というコメントも掲載されていた。その後、自民党の石破茂も同様の発言をしていて大政翼賛だね。

石原の後任を選ぶ東京都知事選も、その顔ぶれたるや、石原が後継指名した副知事の猪瀬直樹をはじめ、パツとしないね。猪瀬は信濃町の東電病院を売却させたって息巻いてるようだけど、あんなの幹が腐った木にぶら下がっていた1個の果実をもぎ取っただけの瑣末な話であって、やるべきは腐った幹自体の治療でしょ。民主党の事業仕分けと同じレベル。都営地下鉄と東京メトロの統合さえ実現できず、九段下の駅のホームの壁をぶち抜いただけでは、ベルリンの壁崩壊にもならない。それに、あのかめ面で国際会議に出席するのは辛気くさくてたまらない(苦笑)。それなら、英語とフランス語に長けている舛添要一のほうがマシ。できっこない統治機構の変革をお題目で唱える東西のポピュリズムを防ぐには、マイナス要素こそあれ、緊急避難的に舛添くらいしかないんじゃないか。厚労大臣でできなかったことを東京でやればいいんだよ。

浅田 「政権交代で改革ができなかった、もっと根本的な統治機構の変革が必要だ」って第三極の連中は言うし、安倍晋三も含め「憲法改正が必要だ」って声も大きくなってる。しかし、政権交代の失敗から学ぶべきなのは、むしろ、やたらと大きなことを言ってもダメだったこと。経済政策にせよ、震災復興や原発問題にせよ、具体的な問題を実際にどう解決していくのかを議論しないと。

横尾忠則現代美術館で三島由紀夫の「愛国」を思う

田中 このあいだ、BS11「田中康夫のつぼんサイコー!」に、「愛国と憂国と売国(集英社新書)の著者で「一水会」顧問の鈴木邦男氏に登場してもらって、真の愛国精神がどういうものか聞かせてもらったよ。愛国心というのは日本人だけのものじゃなく、中国人もアメリカ人も、同じように自分の国を愛しているということ。それを理解したうえで、日本を愛することが大切だと。日本だけが素晴らしいという考えは、思いついた自国愛にすぎない、ただの排他主義だと。そして彼は、三島由紀夫が1968年に朝日新聞の夕刊に寄せたこんな文章も紹介した。「実は私は『愛国心』といふ言葉があまり好きではない。何となく、『愛妻家』といふ言葉に似た、背中のゾツとするやうな感じをおぼえる。(中略)日本人の情緒的表現の最高のものは『恋』であって、『愛』ではない。もしキリスト教的な愛であるなら、その愛は無限定無条件で

首相官邸前の 原発再稼働 反対抗議行動と同じで、 ダンス規制 反対運動は 人間性を回復する 運動なんだ。(田中)



田中康夫

たなか・やすお ●1956年東京都生まれ。
一橋大学法学部卒業。大学在学中に「なんとなく、クリスタル」で文藝賞受賞。
長野県知事、参議院議員を経て、現在、衆議院議員・新党日本代表。

なければならぬ。従って、「人類愛」といふなら多少筋が通るが、『愛国心』といふのは筋が通らない。なぜなら愛国心とは、国境を以て閉ざされた愛だからである。」とね。二人は同じことを言ってるんだけど、鈴木が言うのと「あいつも地に落ちた。非国民だ」と陰口を叩かれるって、苦笑してたよ。あの朝日の文章を読んだ三島ファンが反発したくなるように。

浅田 うん、ナルシズムの延長の自己中心的な「愛国心」じゃダメだったのは確か。ただ、三島由紀夫を神格化するのも危険だと思ふな。「恋」ってのも、白馬にまたがる天皇への「恋関」ともなると、「愛」よりさらに排他的になるわけだしね。そういえば、猪瀬も三島にこだわって、自分が三島の代わりのつもりなのかもしれないけど(笑)。田中 格が違うよね。尖閣諸島にボートで上陸する国会議員はいても、実質的に支配され、上陸すれば銃で撃たれかねない竹島に泳いで渡ろうという「愛国心」の持ち主はどこにもいない。

という写真集をつくらうとしてのが横尾忠則。撮影は篠山紀信で、東京オペラシティアートギャラリーで開催中の「篠山紀信展写真力」でも、聖セバスチアンのように矢を射られて死ぬ三島の写真が最初の一環だったんだね。今日、田中さんと訪れた横尾忠則現代美術館にも、その写真を元にした『理想の実現』と題する絵があった。ただ、横尾は、三島があんな死に方をした後、「男の死」もないだろう、自分がいまやるならむしろ「画家の老醜」か、と。その辺のセンスは、遅れてきた三島崇拜者連中とは全然違うよ。

田中 『理想の実現』では、三島は横尾によって殉教者のごとく描かれているけど、キリスト教は十字軍という名の下に略奪を繰り返して、自由と民主主義を振りかざしてバッファローと先住民民族しかいない大陸を支配してきた歴史があるわけで、そうした宗教や思想に日本人の思考はなじまない。三島は語ってる。「背中がゾツとする愛国心」は、愛妻家と呼ばれる感覚と同じで、佐良直美が歌った「ふたりのために世界はあるのよ」的な偏狭でいかにわしいミーイズムに陥っちゃうだけ。ところで、いかにわしいと言え、風俗営業法のダンス規制その法改正を目指す「レッツダンス法律家の会」が大阪でシンポジウムを開いたときに、サプライズゲストとして参加したんだけど、会場には法律家に交じってダンスを愛するモヒカン頭のクラブの連中もいたよ。そこでぼくは、アフリカのマリ共和国のドゴン族の踊りを例に挙げて、「ドゴン族は『穀物を収穫する』という単語と『お祭りをして踊る』という単語が一緒。どちらも人間であることを意識する喜びの瞬間とい



う意味で、これは偶然ではないと思う」としゃべった。つまり、首相官邸前の原発再稼働反対抗議行動と同じで、ダンス規制反対運動は人間性を回復する運動なんだ。

浅田 ぼくも風営法からダンスの条項を削除するよう求める署名運動「Let's DANCE」の賛同人になってるんだけど、驚くほど多種多様な人たちが署名が集まってる。田中 営業目的でダンスさせちゃいけないってことは、じいさんやばあさんの社交ダンスもやっちゃいけない。実際に高知市の高齢者支援課が、参加者から会費を取る社交ダンスパーティーは風営法の規制対象になる場合があるってお触れを、公民館を所管する市役所内の部署に出してたっていうからね。そんなバカな話はない(苦笑)。

浅田 そう、法改正が必要だよ。最大の問題は、今まで警察の裁量で大目に見てもらってた形になってること。いつでも締め上げられるし、緩めもできるってのは、いちゃばんよくない。しかも、今回、警察が深慮遠謀をもってクラブへの取り締まりを強めたとも思えないんで、単に取り締まりやすからやってるだけでしょう。不法薬物使用の温床になってるとかいうけど、実際にそれが摘発されたわけでもない。

田中 六本木のクラブはわかっているっていうけど、今、日本でいちばんわかっているのは、仲間内を赤軍派のように内ゲバで外に追い出して、いつ落ちるか分からないオスプレイを飛ばし、危険な原発を勝手に再稼働して、景気回復もさせずに「我欲」で解散した首相官邸の主だよ。あそこを真っ先に取り締まらなくちゃ(苦笑)。

もつと言うと、10月に天皇・皇后両陛下が福島県の川内村を訪れて除染作業を視察したけど、あれはとんでもない話。川内村



の20キロ圏内は今でも誰も住んでないんだよ。そのすぐ外側に天皇・皇后はマスクもしないで入っていった、あの日だけはさも住んでいるかのように住民たちが戻ってきた。天皇陛下に向かって旗を振ってるんだからなことを認めちゃいかんでしょう。

浅田 いわゆるポチヨムキン・ヴィレッジってやつ。ロシアの女帝エカテリーナが視察に行くついでに、愛人のポチヨムキン公爵が慌ててハリボテの村をつくって、「村人はこうして幸せに暮らしております」ってエカテリーナを騙す……。でも、除染視察は放射能を浴びるわけだから、もつとたちが悪いな。

田中 天皇制を守ろうとする輩は怒らないとだめ。そんなことを認めた首相の野田佳彦を、橋下流に言えば「抹殺」しないといかんでしょう。

農村社会に成立する贈与のネットワーク

浅田 今号の特集が「ソーシャルなギフト」

高齢者と幼児が微笑みを交換するだけでもいい。そういうのって、貨幣に換算されないギフトのやりとりなんだよ。(浅田)

らしいけど、柄谷行人が援用したカール・ポランニーの図式によると、市場は交換で成り立ち、国家は税金を取って再分配することで成り立つるとすれば、共同体は贈与のやりとり、ギフトのギブ&テイクで成り立つてる、と。田植えでも屋根の葺き替えでも、互いに無償で助け合う。あるいは、お歳暮を贈り合うとかね。で、ポランニーは、市場だけが突出することを防ぎ、市場を社会に埋め戻そうとするわけ。だけど、再分配が官僚制の肥大を招く一方、贈与のネットワークも共同体の相互監視と表裏一体なんで、交換じゃなく贈与だっていっても、お返しをしないやつは村八分ってことにもなりかねない。「ただほど高いものはな」ってやつで、むしろ代金を払うから束縛なしですむってのが交換のいいところではあるんだよね。ソーシャルなギフトについても、その辺を立体的・多面的に考えていかないと。

田中 マーケティング的な言い方をすれば「等価」ではない、と。時間も、値段も、分量も違うというけど、そうではなくて、

その違いを超えた暗黙知というか、お互いさまってことでつながりが成立する。そこに数式的な考え方が入ってくると、人と人のあいだの関値がなくなっちゃう。

一方で、政治資金のネガティブなお金の流れは規制しなきゃいけないのは当然だけど、極論すれば、俺は人からものをもらっていいけどあげてはいけないようになって、まさに政治家は相撲取りと同じで「ごつつあん」の世界を生きる手合いになってる。本来は、もう側、与える側がそれぞれのサーモスタットを作動させ、自律的できえれば何の問題もないはずなのに、そうじゃない前原誠司のような人間がたくさんいるから問題視されちゃう。まさに悪貨が良貨を駆逐し、ギフトを贈るという発想すら問題視する社会になってしまってるんだ。

浅田 貨幣価値に基づく等価交換じゃなく、心づかいのやりとりが、贈与のネットワークを成立させる。高齢者介護なんかも、昔は家族と共同体でやってたけど、それが無理になったんで、介護保険制度をつくり、介護サーヴィスを貨幣で買うようになる。家族や共同体の中で、とくに女性が強く束縛されてたことからすると、そういう介護の社会化は解放でもあるわけ。それでも、以前に訪れた尼崎の宅幼老所なんかを見ると、やっぱりそこには貨幣とサーヴィスの交換を超えた何かがあるんだね。世話をされる喜びに対し、世話をした相手が喜ぶのを見る喜びもある。高齢者と幼児が微笑みを交換するだけでもいい。そういうのって、貨幣に換算されないギフトのやりとりなんだよ。

田中 そう、「マイブレッジャー」の発想。相手への親切は、私の喜び。そこに領収証は不要だからね。

浅田 彰
あさだ・あきら ●1957年兵庫県生まれ。
京都大学大学院経済学研究科博士課程中退。京都造形芸術大学大学院長。
83年に出版されたデビュー作『構造と力—記号論を超えて』はベストセラーに。

